

持続可能な社会づくりの視点から考える

社会科学学習指導

－教材分析表を活用した授業づくりを通して－

急激に変化する社会情勢の中において、国連、文部科学省など関係機関から、持続可能な開発のための教育（ESD）の必要性が提言されている。新学習指導要領の前文に、「持続可能な社会の創り手が求められる」と示されたことを受け、新学習指導要領解説 社会編では、「持続可能な社会」に関連する記述がこれまで以上に増えた。

そこで本研究では、持続可能な社会づくりの視点から考える社会科学学習に着目し、長期研修員と非常勤研修員による協同研究を行った。

長期研修員は、持続可能な社会づくりの視点を六つの構成概念（多様性、相互性、有限性、公平性、連携性、責任性）でとらえ、学年及び分野ごとに整理して具体例を示した教材分析表を作成した。そして非常勤研修員は、教材分析表を活用し、持続可能な社会づくりの視点を明確にした授業実践に取り組んだ。

本協同研究を通して、教材分析表を基に、これまでの社会科学学習指導を持続可能な社会づくりの視点から見直し、発達段階に応じた教材分析・教材開発・授業づくりを行うことができた。

福岡市教育センター

社会科

長期研修員 積山 美紀子

目 次

1	主題について	社・長研－ 1
	(1) 主題設定の理由	
	(2) 主題及び副主題の意味	
2	研究目標	社・長研－ 3
3	研究仮説	社・長研－ 3
4	研究の構想	社・長研－ 3
	(1) 持続可能な社会づくりの視点の明確化	
	(2) 授業改善の手だて	
	(3) 持続可能な社会づくりの視点から考える授業づくりの過程	
	(4) 授業改善の過程	
	(5) 研究の検証	
5	研究構想図	社・長研－ 5
6	研究の実際と考察	社・長研－ 5
	(1) 持続可能な社会づくりの視点から考える教材分析表とは	
	(2) 教材分析表を活用した教材開発	
	(3) 教材分析表を活用した教材づくり	
	(4) 教材分析表を活用した授業づくりの展開例	
7	教材分析表を活用した授業実践における教員の変容	社・長研－ 18
8	研究の成果	社・長研－ 18
	(1) 教材分析表の有効性について	
	(2) 教材分析表を活用した教材開発及び授業づくりについて	
9	研究の課題	社・長研－ 19
	(1) 教材分析表の活用における課題	
	(2) 授業づくりを通しての課題	
	(3) 社会科学習と他教科との関連における課題	
	資料	社・長研－ 21
	引用・参考文献	社・長研－ 25

1 主題について

(1) 主題設定の理由

① 社会の要請から

地球温暖化などの環境問題の深刻化が叫ばれる今日において、豊かな地球の資源を将来世代にまで残すためには、持続可能な開発を行うことが求められる。私達一人一人が自らの行動を振り返り、問題の解決に向けて取り組む姿勢が求められている。

1987年に、環境と開発に関する世界委員会が公表した報告書の中で、「持続可能な開発」とは、「将来の世代の欲求を満たしつつ、現在の世代の欲求も満足させるような開発」と定義された。では、持続可能な開発を続けることができる社会（持続可能な社会）を実現するために、これからの将来を担う児童生徒に対して、どのような学びが必要なのだろうか。

我が国は、2002年の国連総会にて、「持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development=ESD（以下、ESD））」という言葉を提唱した。ESDの目的は、持続可能な社会を主体的に担う人づくりであり、国連を中心に様々な取組がなされている（p.21巻末資料①参考）。

近年では2015年の国連サミットにて、持続可能な開発目標（以下、SDGs）（図－1）を採択するなど、持続可能な社会づくりに向けた取組が注目されている。このSDGsの一つとして、「質の高い教育をみんなに」が設定された。これは、2030年までにSDGs達成のための教育を通して、すべての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにすることである。そこで、国連や日本ユネスコ国内委員会などの関係機関は、学校教育においてESDを推進していくことが望ましいと述べている。

② 我が国の動向から

ESD推進の動きが世界中に広まる中、我が国では、2006年のESD関係省庁連絡会議にて、ESD国内実施計画を策定、2008年には、教育振興基本計画が策定され、ESDの考えが学校教育に位置付けられた。これを受けて、現行学習指導要領にも持続可能な社会づくりの視点が盛り込まれ、総合的な学習の時間等を中心に持続可能な社会づくりの視点から考える学習指導が学校教育でも実施されるようになった。

そして、平成29年に新学習指導要領が公示され、前文の中に、「持続可能な社会の創り手となることができるようにする」と示され、改めてESDの重要性が示された。

さらに、平成29年に示された新学習指導要領解説 社会編には、改定の経緯として、以下のよう

「急激な少子高齢化が進む中で成熟を迎えた我が国にあっては、一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待される。」

以上のことから、社会科学習指導において、児童生徒を「持続可能な社会の担い手」として育成するための授業改善が必要であると考えられる。では、本市の状況はどうだろうか。

③ 福岡市社会科学習における課題から

平成29年8月に本市小・中学校教員を対象に社会科学習指導に関するアンケートを実施した。

ESDに関連する質問内容の結果（p. 2 図－2）を分析すると、「ESD」という言葉が教育振興基本計画や現行学習指導要領に述べられているにも関わらず、その言葉自体を知らない状況もあり、持続可能な社会に対する教員の認識が低いという実態が分かった。



図－1 持続可能な開発目標（SDGs）
国連広報センターホームページより

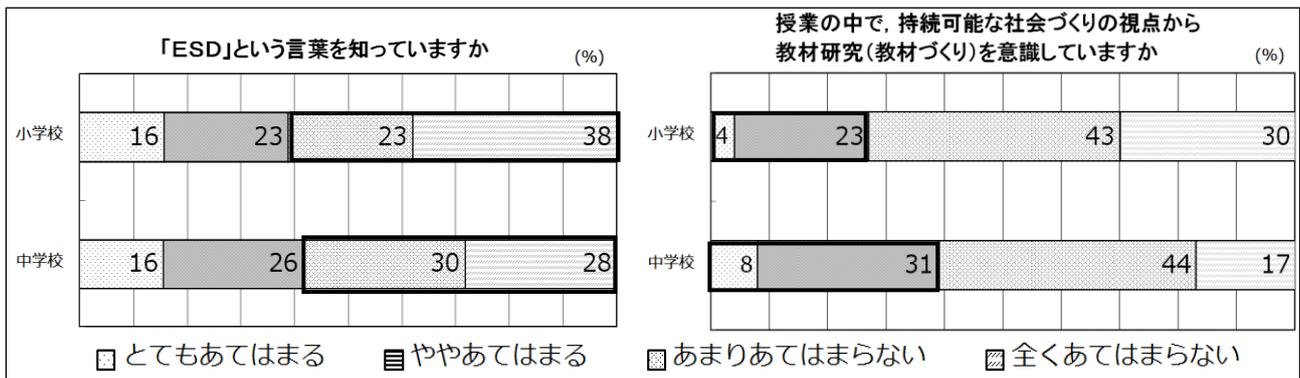


図-2 小・中学校教員に対して実施したアンケートの結果

そして、「社会科の授業における持続可能な社会づくりの視点から教材研究を意識していますか」という質問に対して、「とてもあてはまる」もしくは「ややあてはまる」と回答した割合は、小学校が全体の27%、中学校が39%という結果であり、本市において、持続可能な社会づくりの視点から考える社会科学学習指導が十分に浸透していない状況があることが窺える。

以上3点の理由から、持続可能な社会づくりの視点から社会科学学習指導を見直すことが重要であると考え、本主題を設定した。

(2) 主題及び副主題の意味

① 「持続可能な社会」とは

「我が国における『国連持続可能な開発のための教育10年』実施計画」に基づき、「日常生活の中で、今日の様々な問題の状況を理解し、その要因を自らの暮らしや活動、さらには自身の価値観や経済活動の在り方と関連付けてとらえ、それらを通じて国民一人一人が幸せを実感できる生活を享受でき、将来世代にも継承することができる社会」ととらえる。

② 「持続可能な社会づくりの視点から考える」とは

平成24年に国立教育政策研究所が示した「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究（最終報告書）」（以下、最終報告書）の中で、持続可能な社会づくりは、極めて多くの要素が複雑に絡み合った概念、つまり、システムとしてとらえる必要があるとした上で、このシステムは基本的に「①極めて多くの要素が複雑に絡み合った要素からなり、②それらが互いに作用し合い、③ある方向性へと変化しながら、全体として一定の機能を果たすものである。」と述べられており、（下線及び番号は長期研修員が加筆）その要素を（表-1）のように、六つの構成概念として整理している。

本研究においては、長期研修員が、国立教育政策研究所が示す持続可能な社会づくりの構成概念（以下、構成概念）を社会科学学習における持続可能な社会づくりの課題を見いだす際の視点として整理した一覧表を非常勤研修員に提示する。そして、この一覧表を活用し、これまでの社会科学学習指導における教材を見直し、発達段階に応じた教材分析・教材開発・授業づくりを行う一連の流れを、持続可能な社会づくりの視点から考えるととらえる。

表-1 持続可能な社会づくりの構成概念

観点 概念	①多種多様な要素からなる	②互いに作用し合う	③ある方向へ変化している
人を取り巻く環境に関する概念 (自然・文化・社会・経済など)	多様性 (いろいろある)	相互性 (関わりあっている)	有限性 (限りがある)
人の意志や行動に関する概念 (集団・地域・社会・国など)	公平性 (一人一人大切に)	連携性 (力を合わせて)	責任性 (責任をもって)

③ 教材分析表とは（添付資料参照）

長期研修員が、国立教育政策研究所が示す構成概念を基に、社会科学学習における持続可能な社会づくりの視点として整理し、学年及び分野別に持続可能な社会づくりの視点から学習内容を見直し、その視点の具体例についてまとめた一覧表である。

④ 「教材分析表を活用した授業づくり」とは

長期研修員が作成した教材分析表を非常勤研修員が活用し、各実践単元における持続可能な社会づくりの視点を明確にとらえ、教材分析・教材開発・授業づくりを行っていく一連の流れのことである。

2 研究の目標

長期研修員が持続可能な社会づくりの視点の具体例を示した教材分析表を作成し、非常勤研修員がこの教材分析表を活用した授業づくりを通して、持続可能な社会づくりの視点から考える、社会科学習指導の在り方を明らかにする。

3 研究の仮説

社会科の各単元を、持続可能な社会づくりの視点から整理し、その具体例を示した教材分析表を用いて、教材分析・教材開発・授業づくりを行えば、持続可能な社会づくりの視点から考える社会科学習指導の在り方が明らかになるだろう。

4 研究の構想

(1) 持続可能な社会づくりの視点の明確化

本研究においては、国立教育政策研究所が示した最終報告書において持続可能な社会づくりの構成概念（表-1）を、持続可能な社会づくりの六つ視点（以下、六つの視点）としてとらえる（表-2）。そして（表-3）は、（表-2）の六つの視点における定義を具体的に整理した表である。

長期研修員が、この表（表-3）を基に、社会科学習における六つの視点の具体例について、学年及び分野別に学習指導要領の目標や評価の観点・内容を参考にして明確化したものを「教材分析表」として一覧表に整理する。

そして、「持続可能な社会づくりの視点に立った学習指導」を行うにあたり、教員がこれまでの教材を、「持続可能な社会づくりの視点」から見直していく。

表-2
持続可能な社会
づくりの視点

	視点
I	多様性
II	相互性
III	有限性
IV	公平性
V	連携性
VI	責任性

(2) 授業改善の手だて

本研究において、以下のような内容で、持続可能な社会づくりの視点で考える社会科学習について教材を見直し、長期研修員と非常勤研修員による協同研究を行う。

① 教材開発に向けた準備

国立教育政策研究所の示す持続可能な社会づくりの視点についての定義（表-3）などを参考に、学習指導要領と関連付けた持続可能な社会づくりの視点を社会科学習における具体例として整理し、長期研修員が教材分析表を作成する。そして、非常勤研修員が教材分析表を活用して、具体的な単元目標を考える。

また、非常勤研修員と協力し、教材分析を行う過程において、実践単元の学習内容や既習内容を考えながら、必要に応じて教材分析表の内容項目を付加修正していく。

② 教材との出会わせ方の工夫

教材分析表を基に、教材開発を行う。

その際に、GTと呼ぶことが可能な単元についてはGTに来てもらうことや、児童生徒が追究活動を進めていく際に必要な資料の

表-3 持続可能な社会づくりの視点についての定義

	視点	定義
I	多様性	自然・文化・社会・経済は、起源・性質・状態などが異なる多種多様な事物（ものごと）から成り立ち、それらの中では多種多様な（出来事）が起きていること。
II	相互性	自然・文化・社会・経済は、お互いに働き掛け合い、それらの中では物質やエネルギーが移動・循環したり、情報が伝達・流通したりしていること。
III	有限性	自然・文化・社会・経済は、有限の環境要因や資源（物質やエネルギー）に支えられながら不可逆的に変化していること。
IV	公平性	持続可能な社会は、基本的な権利の保障や自然等からの恩恵の享受などが、地域や世代を渡って公平・公正・平等であることを基盤にしていること。
V	連携性	持続可能な社会は、多様な主体が状況や相互関係などに応じて順応・調和し、互いに連携・協力することにより構築されること。
VI	責任性	持続可能な社会は、多様な主体が将来像に対する責任ビジョンを持ち、それに向かって変容・変革することにより構築されること。

厳選・提示の仕方を工夫する。

③ 持続可能な社会づくりの視点に基づいた問題解決学習の工夫

持続可能な社会づくりの視点から学習問題を見いだすことができる、問題解決型の学習をめざす。実践單元における持続可能な社会づくりの視点は何かを教材分析表を基に考え、その中でも特に重視したい視点を中心に授業を組み立てる。

④ ツールを取り入れた交流活動の設定

問題解決型の学習において、児童生徒が資料等を用いて調べた内容や自分の考えを整理し、互いに意見を比較・検討する活動を設定する。

(3) 持続可能な社会づくりの視点から考える授業づくりの過程（非常勤研修員）

① 教材分析表の活用

長期研修員が作成した教材分析表を基に、実践單元について非常勤研修員を中心に持続可能な社会づくりの視点から教材分析を行う。

② 教材開発

学習問題の追究・解決に必要な情報や持続可能な社会の発展に寄与する人々の営み等について考えることのできる人材や資料の工夫、児童生徒の生活に関わる地域教材の資料化等をめざす。

③ 持続可能な社会づくりの視点に基づいた学習活動の設定

持続可能な社会づくりの視点を取り入れた単元計画を立て、教材化する社会的事象から学習問題を設定し、予想に対する追究活動を行うことができるようにする。

④ 表現物を用いた交流活動の設定

発達段階や学習内容に応じて問題解決に向けた自分の考えを表したツールを用い、比較・検討する活動を展開する。

(4) 授業改善の過程

① 教材分析（長期研修員、非常勤研修員）

長期研修員が作成した教材分析表を基に、非常勤研修員が教材分析を行う。その際に長期研修員も協力し、必要に応じて教材分析表の内容項目について見直し付加修正を行う。

② 教材開発（非常勤研修員）

教材分析表を基に、教材開発を行う。教材開発にあたっては、児童生徒にとって身近な社会的事象の教材化をめざし、GTの活用や資料の厳選・提示の仕方の工夫を行う等、児童生徒が興味・関心をもって学習に取り組むことができるようにする。

③ 授業づくり（非常勤研修員）

長期研修員が持続可能な社会づくりの視点を明記した学習指導案のモデルを示し（p9.資料-4）、これを基に非常勤研修員が学習指導案を作成し、単元における持続可能な社会づくりの視点を明確にもつ。

④ 授業実践と振り返り（長期研修員、非常勤研修員）

非常勤研修員の実践において、持続可能な社会づくりの視点から社会科学習を考えることができたのかを振り返るとともに、実践後に教材分析表の内容項目を再度見直し付加修正を行う。

また、授業において、児童生徒の単元前後の変容を見取り、今後の実践につなげる。

(5) 研究の検証

① 検証内容 「持続可能な社会づくりの視点から考える社会科学習指導を行うことができたか」

② 検証授業 非常勤研修員5名による実践授業（小学校4校、中学校1校）

③ 検証方法

非常勤研修員が教材分析表を活用した授業実践を行い、持続可能な社会づくりの視点から考える社会科学習指導の在り方について、以下の項目から検証を行う。

ア 社会科学習指導における教員アンケートの分析

イ 単元の事前と事後における児童生徒対象の社会科学習チェックシートの分析

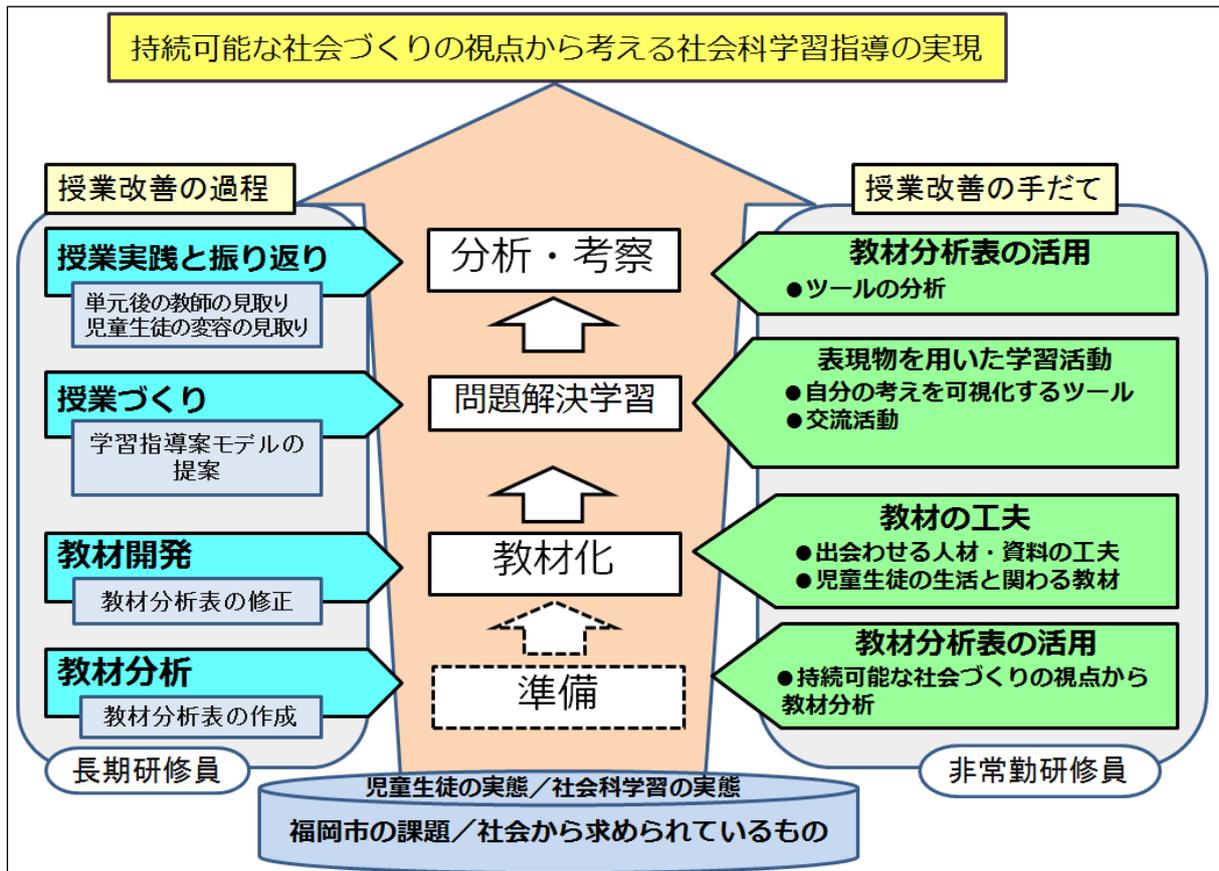
ウ 先行研究事例による、持続可能な社会づくりの学習指導についての調査・分析

エ 教材分析表の有効性における事後の非常勤研修員への聞き取り

オ 授業実践後における非常勤研修員対象のチェックシート分析

※ 各実践において、使用したツールや交流前後の変容分析については、非常勤研修員の報告書に記載。

5 研究構想図



図－3 研究構想図

6 研究の実際と考察

(1) 持続可能な社会づくりの視点から考える教材分析表とは

① 「ESD」と社会科学学習について

「我が国における『国連持続可能な開発のための教育10年』実施計画」において、ESDの学び方・考え方について、「授業の一連の流れについて、関心の喚起→理解の深化→参加する態度や問題解決能力の育成を通じて、『具体的な行動』を促すという一連の流れの中に位置付けること」と示されている（下線は長期研修員加筆）。またESDを実施するにあたり、参加体験型の学習方法や問題解決型の学習方法を活用することが効果的であるとしている（p.7資料-1）。

これは、社会科学学習においてこれまでも求められてきたことであり、新学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び」につながる部分でもある。このことから、社会科学学習において、ESDの実践（持続可能な社会づくりの視点から考える学習）を行うことは深く関わりがあると言える。

さらに、広島大学工学部教授の前田俊二氏は、「ESDは持続可能な発展のための教育である。その意義は、今後の社会を生きていく上で、誰しにも必要なものであり、地球規模で物事を考えていくきっかけとなるものである。大切なことは、社会形成力、参画力をつけていくことである。社会科においては、例えば、節水・節電からESDについて考えていくことができる。また、その関連も学習指導要領に明記されている。したがって、社会科教育はESDを考えるきっかけになる題材が多くあるため、大切な役割を持っていると言える。」と述べている。このことから、社会科にはESDに関する題材が数多くあることが分かる。

これまでESDの取組を行ってきた先行研究等を調査すると、総合的な学習の時間が中心となっている場合が多い。しかしながら、前述したように、新学習指導要領の前文において「持続可能な社会の創り手をめざすことができるようにすること」と明記されていることを踏まえると、今後は総合的な学習の時間のみならず、各教科等においても、持続可能な社会づくりの視点から学習指導を行っていく必要がある。その中でも社会科は、「持続可能な社会の担い手」を育てることをめざすとされていることから、今後新学習指導要領が実施されるのを見越して、社会科学学習において、これまで以上に「持続可能な社会」について考え、学習指導を展開していくことが必

要であると考える。

② 教材分析表作成のための視点の整理

「持続可能な社会の担い手」を育てるために、これからの社会科学学習において、どのような授業実践をしていくことが望ましいのだろうか。本市教員を対象に実施した社会科学学習指導に関するアンケート調査では、ESDという言葉自体を知らない実態もあったことから、ESDについての調査研究結果を分析したところ、持続可能な社会づくりをめざすために必要な教育である、ESDの普及が進まない理由として、次のような内容が挙げられていた。

- ESDに対する教職員の理解が十分でないこと
- 概念理解に由来する難しさが、教材の選定に係る難しさにもつながっていること
- ESDに関する教材が文部科学省や環境省をはじめとする各所から発行されているにもかかわらず、ESDそのものがとらえづらいつ感じていること

そこで、本研究においては、持続可能な社会づくりの視点について整理し、これから社会科学学習を考える際の手だてとなる一覧表を作成し、これを活用して教材分析を行い授業実践につなげることが出来ないかと考えた。教材分析表の作成にあたっては、国立教育政策研究所の最終報告書に記載されている六つの構成概念（前掲）に沿って教材分析表の作成をめざすこととした。

まず、「多様性」「相互性」「有限性」「公平性」「連携性」「責任性」の六つの構成概念を社会科学学習において、どのような具体例として示すことができるのかを中心に据え、先行研究等を参考に、持続可能な社会づくりの視点について整理した。

次に、ESDの実践において重視する能力・態度について整理した。国立教育政策研究所が示す持続可能な社会づくりの視点に立った学習指導で重視する能力・態度（以下、七つの能力・態度）が（表－4）のように整理できることや、この七つの能力・態度が学習指導要領において明記されている「生きる力」にも通ずるとの最終報告書における記述から、これは新学習指導要領において重視する資質・能力ととらえることができると考えた。また、この七つの能力・態度は、OECDの示す国際標準の学力として注目されているキー・コンピテンシーにも関連付けることができることが分かった（p.22巻末資料②参考）。

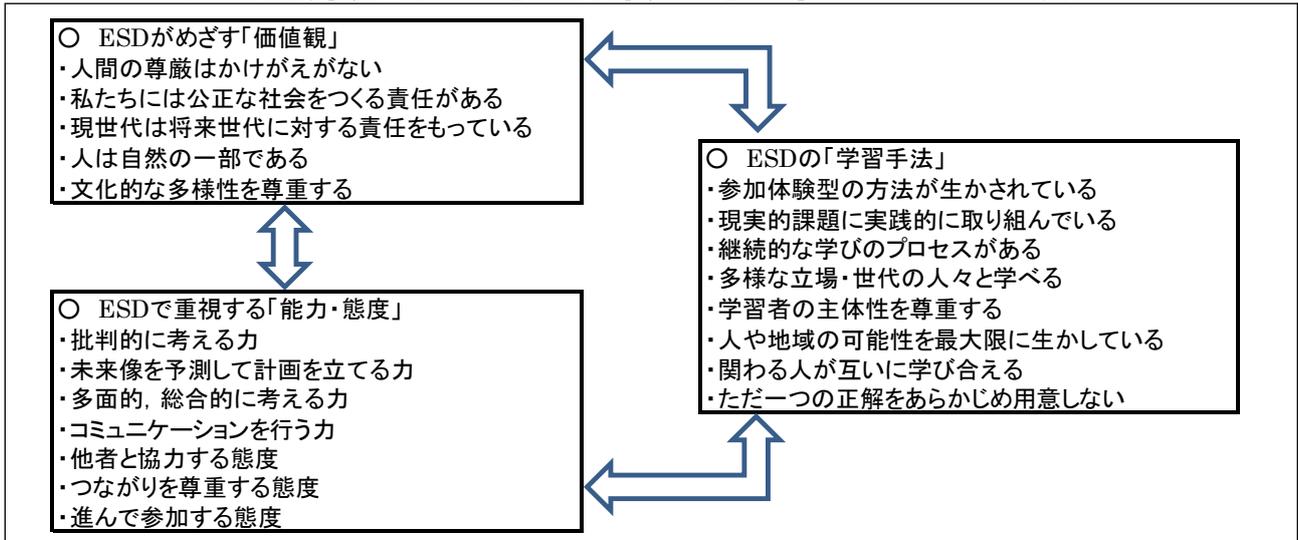
そして、本研究においては、この七つの能力・態度が単元の事前と事後でどのように変容するのか社会科学学習チェックシートを用いて調査することとした。

さらに、国立教育政策研究所による最終報告書や平成28年に出された「ESD（持続可能な開発のための教育）推進の手引き（初版）」、先行研究等を参考に、持続可能な社会づくりの視点に立った学習指導における「価値観」や重視する「能力・態度」、「学習方法」について、（資料－1）のように整理した。

表－4 本研究における持続可能な社会づくりの視点にたつた学習指導で重視する能力・態度
（国立教育政策研究所「ESDの学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み」より作成）

能力・態度	項目	内容
1 批判的に考える力	<批判>	合理的、客観的な情報や公平な判断に基づいて本質を見抜き、ものごとを思慮深く、建設的、協調的、代替的に思考・判断する力。
2 未来像を予測して計画を立てる力	<未来>	過去や現在に基づき、あるべき未来像(ビジョン)を予想・予測・期待し、それを他者と共有しながら、ものごとを計画する力。
3 多面的、総合的に考える力	<多面>	人・もの・こと・社会・自然などのつながり・かかわり・ひろがり(システム)を理解し、それらを多面的、総合的に考える力。
4 コミュニケーションを行う力	<伝達>	自分の気持ちや考えを伝えるとともに、他者の気持ちや考えを尊重し、積極的にコミュニケーションを行う力。
5 他者と協力する力	<協力>	他者の立場に立ち、他者の考えや行動に共感するとともに、他者と協力・協同してものごとを進めようとする態度。
6 つながりを尊重する態度	<関連>	人・もの・こと・社会・自然などと自分とのつながり・かかわりに関心を持ち、それらを尊重し大切にしようとする態度。
7 進んで参加する態度	<参加>	集団や社会における自分の発言や行動に責任を持ち、自分の役割を踏まえた上で、ものごとに自主的・主体的に参加しようとする態度。

資料－1 持続可能な社会づくりの視点の学習指導における
めざす「価値観」、重視する「能力・態度」、 「学習方法」について（長期研修員作成）



③ 教材分析表づくりの実際

教材分析表（p.8 資料－2）は、以下のような内容構成で作成した。

ア 国立教育政策研究所が示す六つの構成概念（「多様性」「相互性」「有限性」「公平性」「連携性」「責任性」）が、持続可能な社会づくりに関わる課題を見いだすための視点であることから、この六つの視点を教材分析表の縦軸として設定した（p.8 資料－2 ①の左側）。（この六つの視点は、社会科学学習だけでなく、ESDにおける視点である。）

イ 国立教育政策研究所が示す、持続可能な社会づくりの構成概念についての定義及びその補足説明について、六つの構成概念それぞれと照らし合わせて明記した（p.8 資料－2 ①の右側）。

ウ 文部科学省、環境省、国立教育政策研究所などの関係機関が発行している、パンフレットやガイドブック、先行研究における実践事例などを参考に、学習内容の例について示した（p.8 資料－2 ②の部分）。

エ 六つの構成概念を基に、小・中学校の社会科における学習内容に合わせて横軸を設定し、小学校は、学年ごと（p.8 資料－2 ③の部分）、中学校は学習する分野ごと（p.8 資料－2 ④の部分）になるように、現行学習指導要領における学習目標や学習内容、国立教育政策研究所教育課程研究センターの示す評価基準作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料、先行研究等を参考にして横軸を設定した。

オ 六つの構成概念を基に、小・中学校それぞれの持続可能な社会づくりの視点の具体的な例として整理し一覧にした。

この教材分析表は、小・中学校接続を意識した学習指導をめざすことができるように、小学校と中学校それぞれの持続可能な社会づくりの視点の具体例が一枚の用紙で分かるように見開きにして作成した。これは、新学習指導要領における改定の趣旨及び要点において、「小・中接続を踏まえ、学校種の違いによる発達段階や分野の特質に応じて、柱書と三つの資質・能力からなる目標を設定した」と示されていることを意識している。

また、国立教育政策研究所は、ESDの指導目標を「持続可能な社会づくりに関わる課題を見だし、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付けることを通して、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養うこと」と示していることも踏まえて、社会科の学習目標とESDの指導目標の関連が分かるようにした。

そして、この教材分析表を活用し、教材分析を行い、授業実践につなげることとした。なお、教材分析表における各学年及び各分野の具体例については、非常勤研修員が行った実践にて教材分析を行った際や実践後の聞き取りなどを経て付加修正を行った。

(2) 教材分析表を活用した教材開発

① 先行研究における実践事例から考える教材開発の過程

広島大学名誉教授の中山修一氏によると、教材開発にあたっては、その目標に照らして適切なテーマの選択が求められるとしており、持続可能な社会の構築には、価値観の転換が必要とされ

る（価値観の転換とは、具体的には、大量消費・大量生産・大量廃棄を善とする社会観を、持続可能な生産・消費・廃棄を善とする社会観へ転換することとされる。）ことから、社会観を転換し、新しい社会（すなわち持続可能な社会）をつくるためには、従来の生活スタイルを持続可能な社会に変えることができる価値判断力や行動力を身に付けることが求められると述べている。

つまり、持続可能な社会づくりの視点で社会科の学習を実践していくためには、社会的事象と出会い、学習問題に対する答えを導く過程においてどのような価値判断をしていくかが必要になってくると言える。この持続可能な社会づくりの視点で社会科を学ぶことによって、児童生徒は、人と人との関わりや、多くの資料との出会い、根拠となる事実を基に自分の考えもつことになる。そして、友達との交流活動を通して、自分と同じ考えであっても、根拠となる事実が異なることに気づき、これによって多面的・多角的な見方・考え方ができるようになると考える。

このような過程を通して「これからもっとよい社会にするためにはどうしたらよいか」、あるいは「今の自分の考えでいいのか」というように、自分の価値観や行動を批判的に考え、一連の思考を繰り返すことが、よりよい社会を築こうとする態度や行動につながり、これが持続可能な社会づくりの視点から考えることにつながる。

そこで、取り上げる単元を、持続可能な社会づくりの視点で見直し、どの視点が当てはまるのかを教材分析表を基に分析し、児童生徒に身につけさせたい能力・態度を整理し、単元計画を立て、教材開発していくこととした。

教材分析表（資料-2）を活用し、教材分析をする過程においては、まず、今回、取り上げようとする単元について、持続可能な社会づくりの視点とどのように関わっているのかについて、（資料-2 ③または④）の中から、該当するものを選び、関連する内容について教材分析を行った。本研究において非常勤研修員が教材開発に取り組んだ単元は（表-5）の通りである。

表-5 本研究において非常勤研修員による教材開発を実施した単元一覧

	該当学年	単元名	指導時間
A小学校	第4学年	地域の発展に尽くした人々	12時間
B小学校	第4学年	私たちの住んでいる県	12時間
C小学校	第6学年	新しい日本のあゆみ	8時間
D小学校	第6学年	水害から私たちを守る政治の働き	8時間
E中学校	第2学年	日本の様々な地域	8時間

資料-2 「教材分析表」（長期研修員作成）別途資料参考

教材分析表		小学校社会科における持続可能な社会づくりの視点の具体例			中学校社会科における持続可能な社会づくりの視点の具体例		
視点	内容	第3-4学年	第5学年	第6学年	地理的分野	歴史的分野	公民的分野
I 多面的・多角的な見方・考え方を養うこと	① 持続可能な社会づくりの視点から、地域の発展に尽くした人々、私たちの住んでいる県、新しい日本のあゆみ、水害から私たちを守る政治の働き、日本の様々な地域	・ 地域の人が目指していること、地域や産業の発展、持続可能な社会づくりの視点から、地域の発展に尽くした人々、私たちの住んでいる県、新しい日本のあゆみ、水害から私たちを守る政治の働き、日本の様々な地域					
	② 持続可能な社会づくりの視点から、地域の発展に尽くした人々、私たちの住んでいる県、新しい日本のあゆみ、水害から私たちを守る政治の働き、日本の様々な地域	・ 地域の人が目指していること、地域や産業の発展、持続可能な社会づくりの視点から、地域の発展に尽くした人々、私たちの住んでいる県、新しい日本のあゆみ、水害から私たちを守る政治の働き、日本の様々な地域					
II 持続可能な社会づくりの視点から、地域の発展に尽くした人々、私たちの住んでいる県、新しい日本のあゆみ、水害から私たちを守る政治の働き、日本の様々な地域	③ 持続可能な社会づくりの視点から、地域の発展に尽くした人々、私たちの住んでいる県、新しい日本のあゆみ、水害から私たちを守る政治の働き、日本の様々な地域	・ 地域の人が目指していること、地域や産業の発展、持続可能な社会づくりの視点から、地域の発展に尽くした人々、私たちの住んでいる県、新しい日本のあゆみ、水害から私たちを守る政治の働き、日本の様々な地域					
	④ 持続可能な社会づくりの視点から、地域の発展に尽くした人々、私たちの住んでいる県、新しい日本のあゆみ、水害から私たちを守る政治の働き、日本の様々な地域	・ 地域の人が目指していること、地域や産業の発展、持続可能な社会づくりの視点から、地域の発展に尽くした人々、私たちの住んでいる県、新しい日本のあゆみ、水害から私たちを守る政治の働き、日本の様々な地域					

本研究の手順としては、【教材分析】→【教材開発】→【授業づくり】→【授業実践・振り返り】（教材分析表の付加修正を含む）という流れで行い、それぞれの教材について検討し、実践につなげた。

非常勤研修員は、教材開発を行う際に今回の実践において、学習過程の中に交流活動の工夫を行うことと、交流活動や学習問題の答えを考える際に自分の考えを整理しやすくするためのツールを位置付けた。そして、実践前と後での、持続可能な社会づくりの視点において、特に重視した項目について、児童生徒にどのような変容が現れるのかを学習で使用したツールなどを用いて検証した（実施使用したツールや交流活動の工夫については、非常勤研修員の報告書に記載）。

また、長期研修員は、今回の実践を通して非常勤研修員が持続可能な社会づくりを意識して進めることができたのか、各実践において児童生徒の持続可能な社会づくりの視点に立った学習指導をとして重視する能力・態度がどの程度変容したのかを見取った。

② 授業づくりに向けた学習指導案のモデル作成

国立教育政策研究所における最終報告書では、単元において目標・内容・教材を持続可能な社会づくりの視点に基づいて、どのようにとらえるのか、その単元を通じて児童生徒にどのような持続可能な社会づくりの視点に立った学習指導で重視する能力・態度を育成したいのかを記していた。

資料-3 学習指導案のモデル

第1学年 組 社会科（地理的分野）学習指導案		(4) 単元におけるESDの視点 (中学生を対象とした作成イメージ)																
構成概念		重視する能力・態度																
<p>サンプル版</p> <p>福岡市立 中学校 教諭</p> <p>1 単元 第3章 「世界の諸地域」 2節 ヨーロッパ州</p> <p>2 指導案</p> <p>(1) 単元設定の理由</p> <p>少子高齢化、情報化、グローバル化などが進む今日において、私たちは、多くの国や人々の関わりをもちながら生活を送っている。そして、地理の学習をしていく中で、我が国の国土に関する認識のみでなく、地域の特色や地域の課題などについても幅広く視野を広げて学ぶことが求められる。</p> <p>本単元は、学習指導要領の地理的分野「世界の様々な地域」の中の「世界の諸地域」の内容である。ここでは、世界の諸地域について、各州に暮らす人々の生活のようすを的確に把握できる地理的事象を取り上げ、それをもとにした主題（テーマ）を設定してそれぞれの州の地域的特色を理解させることをねらいとしている。</p> <p>第3章では、ヨーロッパ州に暮らす人々の生活の様子を取り上げながら、国土の地形や気候の概要、自然環境やそこから見える産業の特色などについて、教科書の資料や地図、資料集などを活用して調べさせたいと考える。また、ヨーロッパ州は、多様な言語や宗教、生活習慣など文化の違いから多くの民族に分かれ、比較的狭い地域に多くの国が集まっている。そして、ヨーロッパの国々は、これまでの経験から戦争を避け、アメリカなどの大国に対抗するために、互いに協力して結びつきを強めEUを結成し、地域統合を進めてきた。そのEU圏内では、今や産業や生活の面で地域統合が著しく進み、経済や貿易がヨーロッパの国々に大きく影響を及ぼしている。その中で、児童生徒の関心や興味を喚起し、持続可能な社会づくりの視点について書く。</p> <p>(2) 本単元で扱うべき内容</p> <p>持続可能な社会に求められていることについて触れて、本単元では特にどの部分に関わるのかを明確にする。</p> <p>学習指導案の形式は、校種や教科、学校での規定の枠などにより異なると思うので、様式に併せて書くのが望ましい。</p> <p>事前に行ったアンケートの結果によると、地理と歴史の学習では、歴史の学習が好きと答えた生徒の人数が多かったが、アジア州の学習を終えての生徒の感想としては、歴史と関連して地理を学ぶことで、地理が苦手と思っていたが印象が変わったと感じている生徒も多かった。また、自分たちのくらしと世界の様子进行比较することで、外国への興味関心をもつようになった生徒も増えるなどしている。</p> <p>(3) 単元の指導案</p> <p>指導にあたっては、これまで学習してきた世界の特色ある自然環境や人々の生活の工夫や変化を生かし、世界を六つの州に分けて異なるテーマを設定する。そして教科書の資料や地図、資料集など様々な資料を活用して学習できるように、各テーマをもとにした、ワークシートやプレゼンテーションソフトの活用を取り入れることで、実際の映像などを踏まえ各州や国の特徴などをより深く捉えさせたい。</p> <p>ESDの視点を本単元ではどのようなところで入れるのかを明記する。本単元で「持続可能な社会」における価値観をどのように転換させるかなど。</p> <p>ESDの視点を見るだけでなく、世界を通して日本をみることもつなげたい。</p>		<p>①多様性 それぞれの国や地域には、地形や気象の特色や文化、言語が多様にあること。</p> <p>②批判的に考える力 話し合い（交流活動）を通して他者の意見を検討・理解して取り入れる</p> <p>③他者と協力する態度 仲間と協同して問題解決に向けた話し合い（交流活動）を行う</p> <p>教材分析表を活用し、本単元における持続可能な社会づくりの構成概念をどのように捉えるのかを、明記する。また、重視する能力・態度についても明記する。</p>																
<p>児童生徒の実態に触れ、本単元で捉える「持続可能な社会づくり」の視点について書く。</p> <p>持続可能な社会に求められていることについて触れて、本単元では特にどの部分に関わるのかを明確にする。</p> <p>学習指導案の形式は、校種や教科、学校での規定の枠などにより異なると思うので、様式に併せて書くのが望ましい。</p>		<p>3. 目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 日本との比較をまじえながら、ヨーロッパ州の自然環境や人々の生活・文化に関心をもち、地域的特色を着眼的に追究しようとすることができる。【関心・意欲・態度】 ○ ヨーロッパ州の地域的特色を、そこに暮らす人々の生活のようすをもとに、多面的・多角的に考察し、自分の言葉で表現することができる。【話し・表現】 ○ 現行学習指導要領における、評価の観点に基づき目標を設定する。【技能】 ○ 文化の共通性と歴史的背景に着目し、EU統合による人々の生活の変化と課題について理解し、その知識を身につけることができる。【知識・理解】 <p>4. 単元計画 3節（全5時間）※ゴシック体は各時間の中心となる発問を示しています。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>次</th> <th>時</th> <th>学習活動・学習内容</th> <th>手だて（留意点）</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">1次</td> <td>1</td> <td>1. ヨーロッパ州 (1) ヨーロッパ州の自然環境 ・地形や気候を中心に、ヨーロッパ州の国々や自然環境などの基本的な特色を理解する。</td> <td>○資料を活用し、北緯40度線に着目して、日本との位置関係を明らかにさせる。 ○北大西洋海流や偏西風が及ぼす影響について気づくことができるように地図帳などの資料を活用する。</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>2. ヨーロッパ州の文化についての基本的な特色を資料を使って調べる。 ・ヨーロッパ州の文化における共通性や多様性には、どのような特色があるのだろうか？</td> <td>○資料を用いてその特色をまよとめさせる。 ○EU統合までの理由を考えさせる。</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">3次</td> <td>1</td> <td>(3) ヨーロッパ統合と人々の生活の変化 ・ヨーロッパ州の国境を越えた結びつきに着目しながら、人々の生活にどのような変化がみられたのかを資料をもとに考える。 ・国境をこえた結びつきによって、人々の生活はどのように変わってきたのだろうか？</td> <td>○ヨーロッパ州の地形や歴史に触れながら、EU統合が、人々の生活にどのような変化をもたらしたのかを、現地の人々の話の資料などももとに考えさせる。</td> </tr> </tbody> </table> <p>ESDの視点がわかるように記載する。 ★や◆などを用いたり、文字の書体を工夫したりするなどして記載する。</p>		次	時	学習活動・学習内容	手だて（留意点）	1次	1	1. ヨーロッパ州 (1) ヨーロッパ州の自然環境 ・地形や気候を中心に、ヨーロッパ州の国々や自然環境などの基本的な特色を理解する。	○資料を活用し、北緯40度線に着目して、日本との位置関係を明らかにさせる。 ○北大西洋海流や偏西風が及ぼす影響について気づくことができるように地図帳などの資料を活用する。	2	2. ヨーロッパ州の文化についての基本的な特色を資料を使って調べる。 ・ヨーロッパ州の文化における共通性や多様性には、どのような特色があるのだろうか？	○資料を用いてその特色をまよとめさせる。 ○EU統合までの理由を考えさせる。	3次	1	(3) ヨーロッパ統合と人々の生活の変化 ・ヨーロッパ州の国境を越えた結びつきに着目しながら、人々の生活にどのような変化がみられたのかを資料をもとに考える。 ・国境をこえた結びつきによって、人々の生活はどのように変わってきたのだろうか？	○ヨーロッパ州の地形や歴史に触れながら、EU統合が、人々の生活にどのような変化をもたらしたのかを、現地の人々の話の資料などももとに考えさせる。
次	時	学習活動・学習内容	手だて（留意点）															
1次	1	1. ヨーロッパ州 (1) ヨーロッパ州の自然環境 ・地形や気候を中心に、ヨーロッパ州の国々や自然環境などの基本的な特色を理解する。	○資料を活用し、北緯40度線に着目して、日本との位置関係を明らかにさせる。 ○北大西洋海流や偏西風が及ぼす影響について気づくことができるように地図帳などの資料を活用する。															
	2	2. ヨーロッパ州の文化についての基本的な特色を資料を使って調べる。 ・ヨーロッパ州の文化における共通性や多様性には、どのような特色があるのだろうか？	○資料を用いてその特色をまよとめさせる。 ○EU統合までの理由を考えさせる。															
3次	1	(3) ヨーロッパ統合と人々の生活の変化 ・ヨーロッパ州の国境を越えた結びつきに着目しながら、人々の生活にどのような変化がみられたのかを資料をもとに考える。 ・国境をこえた結びつきによって、人々の生活はどのように変わってきたのだろうか？	○ヨーロッパ州の地形や歴史に触れながら、EU統合が、人々の生活にどのような変化をもたらしたのかを、現地の人々の話の資料などももとに考えさせる。															

資料-4 学習指導案モデルにおける記入例の提示

(4) 単元におけるESDの視点 (中学生を対象とした作成イメージ)	
構成概念	重視する能力・態度
<p>(記入例)</p> <p>I多様性 それぞれの国や地域には、地形や気象の特色や文化、言語が多様にあること。</p> <p>II相互性 共通通貨を使用することで、産業が多様に展開されていることや人々の移動。</p> <p>教材分析表を活用し、本単元における持続可能な社会づくりの構成概念をどのように捉えるのかを、明記する。また、重視する能力・態度についても明記する。</p>	<p>(記入例)</p> <p>①批判的に考える力 話し合い（交流活動）を通して他者の意見を検討・理解して取り入れる</p> <p>③他者と協力する態度 仲間と協同して問題解決に向けた話し合い（交流活動）を行う</p>

資料-5 単元計画のモデルの提示

4. 単元計画 3節（全5時間）※ゴシック体は各時間の中心となる発問を示しています。			
次	時	学習活動・学習内容	手だて（留意点）
1次	1	1. ヨーロッパ州 (1) ヨーロッパ州の自然環境 ・地形や気候を中心に、ヨーロッパ州の国々や自然環境などの基本的な特色を理解する。	○資料を活用し、北緯40度線に着目して、日本との位置関係を明らかにさせる。 ○北大西洋海流や偏西風が及ぼす影響について気づくことができるように地図帳などの資料を活用する。
	2	2. ヨーロッパ州の文化についての基本的な特色を資料を使って調べる。 ・ヨーロッパ州の文化における共通性や多様性には、どのような特色があるのだろうか？	○資料を用いてその特色をまよとめさせる。 ○EU統合までの理由を考えさせる。
3次	1	(3) ヨーロッパ統合と人々の生活の変化 ・ヨーロッパ州の国境を越えた結びつきに着目しながら、人々の生活にどのような変化がみられたのかを資料をもとに考える。 ・国境をこえた結びつきによって、人々の生活はどのように変わってきたのだろうか？	○ヨーロッパ州の地形や歴史に触れながら、EU統合が、人々の生活にどのような変化をもたらしたのかを、現地の人々の話の資料などももとに考えさせる。

ESDの視点がわかるように記載する。
★や◆などを用いたり、文字の書体を工夫したりするなどして記載する。

そこで、本研究においては、取り上げる単元が持続可能な社会づくりの視点とどのように関連しているのかを把握しやすくするために、学習指導案にその箇所が分かるような工夫をすることとした。そして、長期研修員が先行研究の実践事例等を参考に、持続可能な社会づくりの視点に立った学習指導案の作成手順が分かるように解説を加えた学習指導案のモデルを作成・提示し、(p.9資料-3)これを非常勤研修員の各実践単元においても参考にしながら、単元計画を立て学習指導案を作成する際に活用できるようにした。

実際に学習指導案モデルを参考に作成した非常勤研修員作成の学習指導案には、児童生徒に単元を通して身に付けさせたい持続可能な社会づくりの見方・考え方まで具体化し、それが分かるように表記することができた。先行研究における実践事例の学習指導案の中にも同様の記載を行っているものもあり、単元内における持続可能な社会づくりの視点を明確にして単元計画を立てていくことの必要性を感じた。

また、単元を通して児童生徒に身に付けさせたい能力・態度についても明記し(p.9資料-4)、本時展開例に持続可能な社会づくりの視点との関わりが分かるように記号などを用いて、表記した(p.9資料-5)。

(3) 教材分析表を活用した教材開発

広島工業大学教授の前田俊二氏は、「持続可能な社会づくりの考え方を取り入れた教材開発について、すべての関連的単元(毎時間)において、参加体験型の授業を仕組むのは、授業時間数の制限から困難な面がある」と述べている。

さらに、先行研究を見ると、ESDの実践事例が最も多いのは総合的な学習の時間や生活科の学習であり、次いで学級活動または学校行事であったことから、これらの実践においては、参加体験型の形態が多く取られていた。中には、各教科等と総合的な学習の時間とを連携させた教科横断的な実践例もあり、ESDの実践を通して各教科等とつながっていくようなカリキュラムを導入している学校もあった。

また、教科ごとの実践事例を見ると社会科が多く、次に理科の順で実践が多かった。特に予想を確かめるための追究活動や互いの考えを交流するための場面において、参加体験型の授業を導入していた。このことから、本研究においても、同様の場面において児童生徒が主体的に追究できる授業づくりに取り組んだ。

中学校社会科の実践事例をさらに詳しく見ると、最も実践が多かったのは、地理的分野で、次に公民的分野であった。地理的分野においては、単元の中に環境問題や防災への取組、エネルギー開発、持続可能な開発など、持続可能な社会づくりの視点とつながる内容が多かった。

公民的分野では、学習指導要領において内容(4)私たちと国際社会の諸課題の「よりよい社会をめざして」において、「持続可能な社会を形成するという観点から、私たちがよりよい社会を築いていくために解決すべき課題を探究させ、自分の考えをまとめさせる」としている。

このことから、持続可能な社会について考える学習が、中学校社会科のまとめとして位置付けられており、これは中学校新学習指導要領においても、「D 私たちと国際社会の諸課題」の大項目以下の内容に引き続き取り上げられていることから、今後も公民的分野において「持続可能な社会」についての学習が求められることが分かる。

その一方で、歴史的分野においては、実践事例が少なかった。中学校新学習指導要領解説 社会編では、「歴史学習において国家及び社会並びに文化の発展や人々の生活の向上に尽くした歴史上の人物と現在に伝わる文化遺産を尊重しようとすることの大切さについての自覚などを深める。」と述べられている。

児童生徒が歴史的事象を学ぶ上で持続可能な社会づくりの視点から考えるためには、教員が現在の私たちの生活とのつながりや国際社会への関心をもつことができるように工夫し、教材開発することが必要であると言える。しかしながら、取り扱う内容によっては、毎時間持続可能な社会づくりの視点から教材開発を行うことは難しく、実践する困難さもある。

以上のことから、非常勤研究員と話し合い、本研究では地理的分野・歴史的分野・公民的分野の三分野の中から、持続可能な社会について考えることのできる単元を選択し、教材分析表を用いて教材開発を行った。

そして、実際に取り上げる単元を持続可能な社会づくりの視点で考えたときに、これまでの教員自身の授業づくりを振り返り、どのような学習指導を進めていくことが望ましいのかを考え、授業

づくりを行った。

単元計画を立てる際には、(資料-6)の内容を参考にしていくことも望ましいことから、長期研修員が集めた先行事例の情報や関連する資料等についても非常勤研修員に提示した。

そして、実際に非常勤研修員が授業実践する単元について、さまざまな意見を出し合い教材づくりにつなげた。

(4) 教材分析表を活用した授業づくりの展開例

今回の実践は、以下のような手順で行った。まず、実践する単元を選択した後、教材分析表を基に教材分析を行った。

(資料-7)は、今回取り扱う単元における持続可能な社会づくりの視点に立った学習指導で重視したい能力・態度について、教材分析後に整理するための表である。㉗の部分には、単元内における持続可能な社会づくりの視点、㉘の部分には、持続可能な社会づくりの視点に立った学習指導で重視したい能力・態度を明記した。これを基に各実践についてのちほど述べる。

各実践において、非常勤研修員は、児童生徒に持続可能な社会づくりの見方・考え方をもたせるため、児童生徒が主体的に取り組める学習課程の下、次のような工夫を行った。

- 自分の考えをまとめるためのツールの工夫
- 資料提示の工夫 (自作の資料集, ICTを活用した資料提示 等)

学習問題の答えに対する予想や答えを考える場面においては、児童生徒が記述した内容について分析を行った。そして、その結果を基に、次時の学習においてどのような交流活動を設定するか、児童生徒に自分の考えを示したツールをどのように活用させるかについて考えていった。

各実践において作成したツールの活用方法については、非常勤研修員が使い方の例を示すなどの工夫を行い、その活用方法を児童生徒に指導することで、その後の活動をスムーズに行うことができていた。

非常勤研修員は、実践単元におけるツールを用いた交流前後の児童生徒の変容分析等を行った。すると、児童生徒が自分の考えを記述したツールや学習後の感想には、非常勤研修員が意図している持続可能な社会づくりの視点に関連する内容がすでに書かれているものがあつた。その一方で、現時点で持続可能な社会づくりの視点に関連する内容をなんとなくイメージとしてとらえていると考えられる記述も見られた。

また、単元の事前と事後において児童生徒の持続可能な社会づくりの視点に立った学習指導で重視したい能力・態度の変容を見取るために、社会科学習チェックシートを取り入れ分析・考察を行った。

さらに、長期研修員は、非常勤研修員に対して単元実施後に一連の取組についての聞き取り及びチェックシートを実施し、その結果を分析した。

以下は、非常勤研修員による各実践についての概要をまとめたものである。各実践における単元計画及び、用いたツールの説明、交流活動などの詳しい内容については、非常勤研修員の報告書を参考にされたい。

資料-6 長期研修員がまとめた単元計画の作成のポイント

- ESDは持続可能な社会づくりに関わる課題に対して、多面的・総合的に探究していくことが求められる。
- 取り上げる題材が、実生活や実社会とつながっていることに気付き、それらについて自分たちのこととしてとらえ、関心や認識をもたせること。
- 学習の中で出てきた事を関連付けてみたり、考えたりすることが大切である。
- 児童生徒に密接に関わる課題の提示の工夫をする。
- 「疑似体験を通した葛藤を盛り込む」→「自分のこととして思考する場面展開」→「課題解決のための交流活動の場の設定」という授業の流れの工夫を取り入れる。

資料-7 教材分析表に基づく視点の整理表

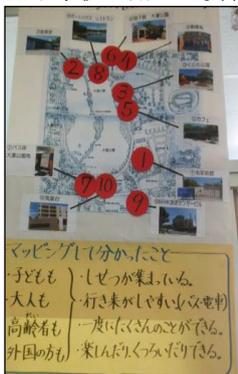
実施学年 単元:		() / 小学校 第()学年										
持続可能な社会づくりの視点						持続可能な社会づくりの視点に立った 学習指導で重視する資質・能力						
I	II	III	IV	V	VI	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性	批判的に考える力	未来像を予測して計画を立てる力	多面的・総合的に考える力	コミュニケーションを行う力	他者と協力する態度	つながりを尊重する態度	進んで参加する態度
㉗	【相互】	【有限】	【公平】	【連携】	【責任】	【批判】	【未来】	【多面】	【伝達】	【協力】	【関連】	㉘

資料－8 A 小学校における単元の整理表

実施学年		第4学年										
単元		地域の発展に尽くした人々										
持続可能な社会づくりの視点		持続可能な社会づくりの視点に立った学習指導で重視する資質・能力										
I	II	III	IV	V	VI	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
【多様】	【相互】	【有限】	【公平】	【連携】	【責任】	【批判】	【未来】	【多面】	【伝達】	【協力】	【関連】	【参加】
	○		○	◎		○	○				○	

資料－9

A 小学校で用いた資料

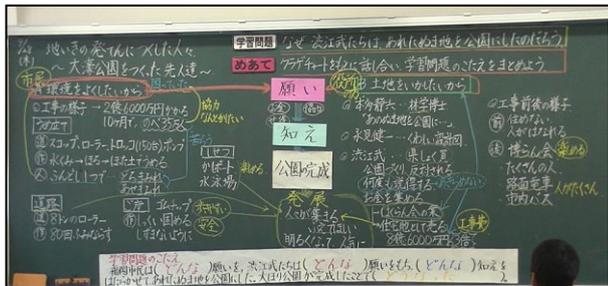


資料－10

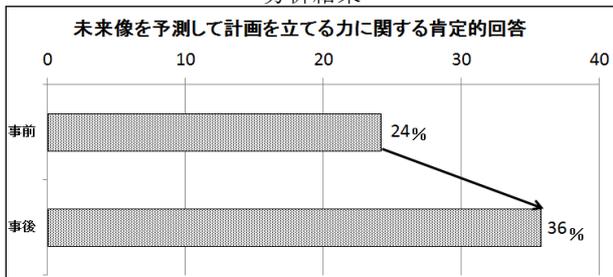
A 小学校での授業の様子



資料－11 A 小学校での授業後の板書



資料－12 A 小学校の社会科学学習チェックシートの分析結果



教材分析表を活用し【連携性】を重視した結果、全体交流後83%の児童が人々の働きと発展に着目して学習問題の答えを記述することができた。さらに持続可能な社会づくりの見方・考え方をとらえさせるために、非常勤研修員は追加資料として過去の新聞記事と現在の大濠公園を清掃している人の写真を提示した。

そして、「なぜ90年間も大濠公園はあり続けることができたのでしょうか」と発問した。発問後の振り返りを非常勤研修員が分析したところ、全体の83%が大濠公園を守る人々がいたことや市民の憩いの場として公園を大切に扱ってきたことに目を向けた記述が見られた。

また、単元前後の社会科学学習チェックシートを分析した。すると、本単元において重視した能力・態度の一つである「未来を予測して計画を立てる力」に関する肯定的回答が、単元前と比べて10ポイント増加した（資料－12）。さらに「批判的に考える力」に関する質問項目についても同様の変化が見られた。

以上のことから、本単元において【連携性】を重視した教材づくりを行った結果、児童に身につけさせたい能力・態度に変容が見られたことから、本単元を教材開発した成果を得ることができたと考えられる。

① 小学校 中学年

実践1 A 小学校第4学年

単元：「地域の発展に尽くした人々」

本単元は、学習指導要領における「人々の生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働き」についての学習内容である。教材分析表を活用し、持続可能な社会づくりの視点として特に重視したのは、【連携性】である（資料－8）。

本単元では、地域の発展に尽くした先人の働きや苦心についての学習を通して、自分たちの住む地域の憩いの場である公園を取り上げ、教材開発を行った。公園が建設されるまでに尽力した人々の働きから、本市の発展へ一翼を担った公園建設があったことで、人々の生活が向上したことを通して当時の人々の考えや思い、生き方を学ぶ。

非常勤研修員は、児童が学習問題の答えを考える際に、参考となる資料について、郷土史や過去の新聞記事、関係機関への取材等を行い、必要な内容をまとめたものを資料集として作成した。

そして、必要に応じて、拡大したものを用意したり、学習問題の設定後から全体交流までの学習活動において分かったことを新たな資料として掲示したりするなどの工夫を行った（資料－9）。

児童は、中間交流や全体交流において、根拠となった資料について触れながら、自分の考えを述べる際には「資料の○ページを開いてください」「自分が△△△と考えた理由は、資料○ページに□□□と書かれていたからです」というように相手に分かりやすく、考えの根拠を明確に発言することができていた（資料－10）。

本実践では、学習問題に対して、追究の視点を基に資料を用いて調べる計画を立てた。

そして、児童がツールを用いて個人で自分の考えをまとめる場面、小グループでお互いの考えを話し合い、自分の考えを強化する場面や最後に全体交流をする場面を設定することができていた。

実践2 B 小学校第4学年
単元：「わたしたちの住んでいる県」

本単元においては「私たちの住んでいる県」の学習において、歴史を守り続ける太宰府市の人々の暮らしを取り上げた。持続可能な社会づくりの視点として特に重視したのは、【連携性】である（資料-13）。

本単元においては、「太宰府市を訪れる観光客は、なぜ年々増えていっているのだろうか。」という学習問題を設定し、太宰府市の様子について学びながら、学習問題に対する予想を考えていった。

太宰府市を知っている児童も知らない児童も共通に理解することができるようにするため、福岡市との位置関係が分かる県の立体地図や太宰府市の様子が見られるような写真資料を準備した。本単元においても、非常勤研修員自ら現地に足を運び取材してきた内容をまとめ、資料集として活用することができるようにし児童に配布した（資料-14）。

太宰府市の人々の暮らしを知ることができるために、取材した対象は、太宰府市役所の方や観光客へボランティアガイドをしている方である。

児童は、これらの資料を基に、太宰府市に観光客が多く訪れる背景には、どのような取組があるのかを考えていった。そして、学習問題に対する予想を出し合った後、「文化遺産を守るための取組」「市民の取組（ボランティア等）」「交通網の整備」の3点に追究の視点を絞り、自分の考えをまとめ、意見交流につなげていった。

児童が、自分の考えをまとめる際には、前時までに作成したラベル図（資料-15）を参考に、非常勤研修員が準備したツールを用いた。そして、このツールを用いて交流活動を進めていった。

教材分析表を用いて【連携性】を重視し、学習問題の答えを考えた全体交流後の児童の記述を分析したところ、複数の根拠から学習問題の答えを考えることができた児童は26%にとどまっていた。そこで児童の学習問題に対する自分の考えを複数の根拠から客観的に把握しツールに整理するために、同じ予想に基づきながらも異なる根拠をもった児童同士を小グループとして編成し、中間交流を設定した。この中間交流において、児童は自分と同じ考えをもっている、その根拠となる資料や事実が異なることに気付き、自分の根拠と比較・検討することで、自分のツールに整理した内容を相互補完するこ

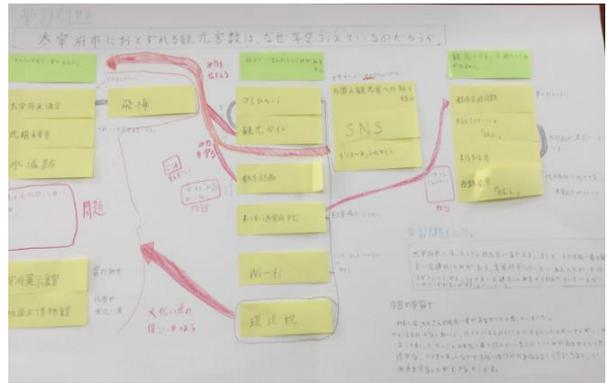
資料-13 B 小学校における単元の整理表

実施学年	第4学年											
単元	私たちの住んでいる県											
持続可能な社会づくりの視点				持続可能な社会づくりの視点に立った学習指導で重視する資質・能力								
I	II	III	IV	V	VI	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
【多様】	【相互】	【有限】	【公平】	【連携】	【責任】	【批判】	【未来】	【多面】	【伝達】	【協力】	【関連】	【参加】
	○	○		◎	○	○	○	○			○	

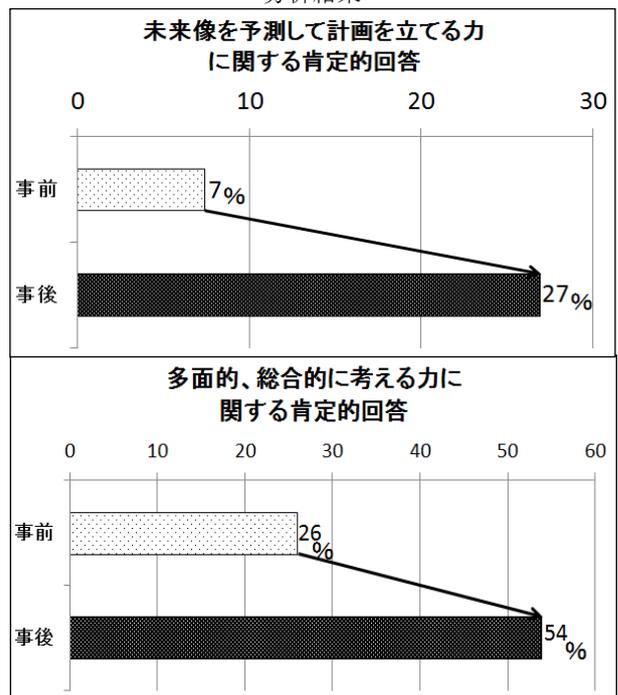
資料-14 非常勤研修員が自作した資料集



資料-15 児童が作成したラベル図



資料-16 A 小学校の社会科学習チェックシートの分析結果



資料-17 単元末の児童の感想

家族とおはあちゃんてい
います。車でいって使
は号などに来たことか
ないのじゃうたいになら
ないため、わたしたちも
協力して、うたいを
つらしたいです。

とができた。

そして、自分の考えをまとめたツールを用いて再度全体交流を行った。この全体交流において、「文化遺産を守るための取組」「市民の取組（ボランティア等）」「交通網の整備」それぞれの追究の視点から、中間交流でまとめた児童の考えを発表させた。全体交流を行うことで、他の追究の視点にも目を向けることになり、学習問題に対する答えを総合的・構造的にとらえることができた。

全体交流後の学習のまとめにおいて児童が記述した内容を分析したところ、複数の根拠から記述することができた児童は75%に増えた。

以上のことから、本単元において児童は太宰府に住む人々のくらしと経済発展を両立させるためには、観光客にたくさん来てもらうことはもちろんのこと、文化遺産を守るための取組やそこにくらす人々の生活を守るために交通網の整備も必要であることに気付くことができた。

本実践における単元前後の社会科学学習チェックシートを分析したところ、「未来像を予測して計画を立てる力」に関連する項目において20ポイント、「多面的、総合的に考える力」に関連する項目において28ポイント増加し、大きな伸びが見られた（p.13資料-16）。

また、単元末の児童の感想には（資料-17）のように、自分がこれまでに太宰府に行ったことを振り返り、次に太宰府を訪れることがあればどのような行動を取りたいのかという記述もあった。このことから、【連携性】を重視した授業づくりを行った結果、学習したことを基に太宰府市の抱える問題を解決してくために、自分が関わることがあればどのように行動したいのかを考えることができ持続可能な社会づくりの見方・考え方が育ったと言える。

② 小学校高学年

実践3 C 小学校第6学年

単元：「新しい日本の歩み」

本単元において、持続可能な社会づくりの視点として特に重視したのは、【責任性】である（資料-18）。

本単元は、小学校学習指導要領（1）のケにあたり、歴史学習の最後の内容になる。そこで、単元における目標を、我が国は、第二次世界大戦後、民主国家として出発したことや、国民生活が向上し、国際交流や国際貢献の面で重要な役割を果たしてきたことを理解し、誇りをもち、今後の日本の役割や今後生かしていくことについて考えていくことができるようにと設定した。

前時までの学習を踏まえて、「なぜ戦後19年でオリンピック東京大会を開くことができたのだろう。」と学習問題を設定し、児童の予想を出し合ったあと、「新しい国づくり」「国民生活の向上・経済」「外国との関係」の三つの追究の視点をつくり追究活動を設定した。

そこで、非常勤研修員は、児童が自分の考えと根拠を整理しやすくするために、調べた社会的事象のつながりをとらえる上で効果的とされているコンセプトマップをツールとして用意した。

コンセプトマップには、自分の考えとその根拠の関連性が分かるようにツールの使い方を非常勤研修員が指導した。

そして、児童がコンセプトマップを作成した後、自分の考えとその根拠について見直し比較・検討するために全体交流を設定した。

児童は、自分の作成したコンセプトマップを基に自分が調べた追究の視点に沿って考えたことを色分けされたカードに記入した。全体交流では、このカードを使って発表を行い、追究の視点ごとにカードを整理し、非常勤研修員が黒板に貼っていった（資料-19）。この時に非常勤研修員が、コンセプトマップと同じように黒板にまとめていく工夫をしたことで、児童は、黒板に整理された内容を基に、自分のコンセプトマップを再度見

資料-18 C 小学校における単元の整理表

実施学年		第6学年										
単元		新しい日本のあゆみ										
持続可能な社会づくりの視点						持続可能な社会づくりの視点に立った学習指導で重視する資質・能力						
I	II	III	IV	V	VI	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
【多様】	【相互】	【有限】	【公平】	【連携】	【責任】	【批判】	【未来】	【多面】	【伝達】	【協力】	【関連】	【参加】
	○		○	○	◎	○		○			○	

資料-19 C 小学校での授業後の板書



直し、自分の考えを相互補完することができていた。

さらに、全体交流後に児童が自分の考えの見直しを終えた後、非常勤研修員は1965年に発足した青年海外協力隊における日本のODAの実績や政府予算について自作した資料を提示した。そして、オリンピック東京大会以降、我が国が自国の発展だけでなく、国際社会の一員として国際貢献活動を行っている事実について知らせた。

これによって、日本が国際貢献活動を行うことで、国際社会の一員として果たしている役割や価値に気付き、今後もその責任を果たすために国際貢献活動を継続していく必要があるなど【責任性】についての記述が見られた。

児童の学習のまとめには、「1964年オリンピック東京大会を開くことができた日本は、環境保護や経済発展、外国との関わりや、他国を援助したり、国交回復ができた事も関係している。」との記述もあった。概ね児童は、戦後19年という短期間でオリンピック東京大会を開催することができたのは、新しい国づくりに向けた取組、国民生活の向上や経済発展、そして国際社会における重要な役割があったからであると気付き、学習後のまとめに記述することができていた。

単元前後の社会科学学習チェックシートを分析したところ、本実践において重視した能力・態度の「批判的に考える力」「多面的、総合的に考える力」「つながりを尊重する態度」に関する質問項目の肯定的回答に伸びはあまり見られなかった。その一方で、「話し合いのときに友達に対して自分の考えとそのわけを説明することができますか」という「コミュニケーションを行う力」に関する質問項目の肯定的回答の分析結果を見ると（資料-20）のような結果が出た。

これは、本単元においてコンセプトマップに自分の考えをまとめ、全体交流で作成したコンセプトマップを活用したことや自分の考えを見直す際に有効的に活用することができた実感できたからであると考えられる。

資料-20 C小学校の社会科学学習
チェックシートの分析結果

コミュニケーション能力に関する 肯定的回答		
	事前	事後
あてはまる	19%	27%
どちらかといえばあてはまる	59%	65%

実践4 D小学校第6学年
単元：「水害から私たちを守る政治の働き」

本単元において、持続可能な社会づくりの視点として重視したのは【相互性】である（資料-21）。

本時の学習においては、学習問題の答えを考える際に、前時までに児童が記述した学習問題に対する自分の考えについて、あらかじめ非常勤研修員が学級全員の考えを整理・分析し、その中から一人の考えを抽出し、それを基に学級全体で交流していった（資料-22）。

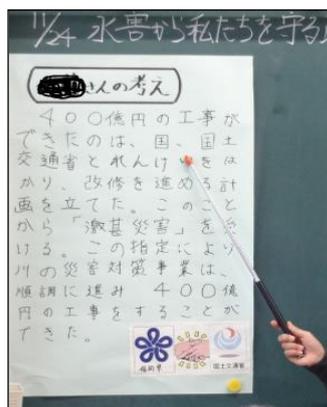
本単元は、児童が住む地域の河川が過去に氾濫し甚大な被害が出た際、河川の管理者である福岡県が実施した災害対策事業を取り上げた。そして、「福岡県はなぜ400億円の事業を行うことができたのだろう。」と学習問題を設定した。そして、学習問題に対する予想を出した後、二つの追究の視点をつくり調べ学習を行った。

非常勤研修員は、児童がこだわりをもって追究活動を行うことができるように、災害発生当時の公民館長への取材や災害対策事業に関わった県の担当者へ取材した内容をまとめたもの、災害当時の様子が分かる写真や新聞記事など必要な資料（資料-23）をまとめ本単元における資料集として児童に配布した。

資料-21 D小学校における単元の整理表

実施学年	第6学年											
単元	水害から私たちを守る政治の働き											
持続可能な社会づくりの視点					持続可能な社会づくりの視点に立った 学習指導で重視する資質・能力							
I	II	III	IV	V	VI	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
【多様】	【相互】	【有眼】	【公平】	【連携】	【責任】	【批判】	【未来】	【多面】	【伝達】	【協力】	【関連】	【参加】
	◎		○	○			○	○		○		

資料-22
代表児童の答え



資料-23
提示した資料



資料-24 D小学校における授業後の板書



児童はこの資料集を活用し、資料から読み取った根拠となる事実を基に自分の考えをまとめ、ツールに記述していった。本実践において、非常勤研修員が用意したツールはコンセプトマップである。このコンセプトマップには、学習問題とその予想が記述できるように工夫されており、非常勤研修員が用意した資料集を活用し、400億円という災害対策事業を成し遂げるまでの道筋やそれに関わる事実をまとめさせた。

学習問題に対する確かな自分の考えをもたせるために、児童が記述した考えの中から、激甚災害の適用により多額の予算を計上できたことが全体交流における話題の中心となるよう「県の予算」について触れているものを抽出した。

そして、代表児の発表を基に全体交流を行い、その後再度自分の考えを見直し、振り返る活動を設定した。全体交流の際非常勤研修員は、板書をコンセプトマップと同じような構造で整理した（p.15資料-24）。その結果、児童は友達の発表や板書を基に再度自分の考えを見直し、友達の発表を聞いて納得したことを自分のコンセプトマップに赤で付け加えていくことができていた。

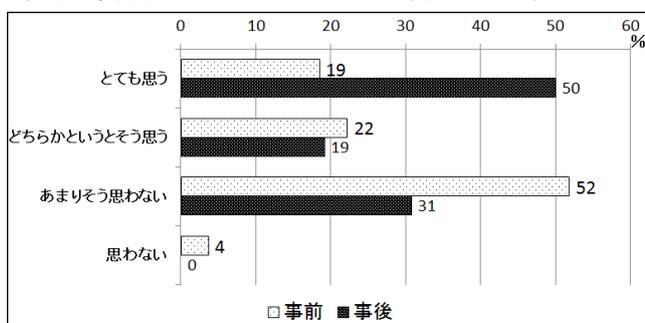
自分の考えを見直す活動後に、児童が記述したコンセプトマップを非常勤研修員が分析したところ、29人中23人の児童に付け加えを行った変容が見られた。さらに、児童の学習プリントからは、「地域住民」「県職員」「国」が関わって400億円の事業を行うことができたことについても見取ることができ、本單元において重視した【相互性】に関わる記述が増えた。

單元前後に実施した社会科学習チェックシートの分析からは、「私たちの生活が様々な人やものにつながっていたり、支えられたりしていると思うことはありますか」という質問項目において肯定的回答が増えた（資料-25）。これは、本單元において重視した能力・態度の「多面的、総合的に考える力」に関わる内容項目であり、【相互性】にもつながる部分でもある。

また、「政治にはどんなはたらきがあると思いますか」という質問に対して、單元後の児童の記述には、「人々のくらしや命を守ることができるのはたらきがあると思う。私はせんきょにいたりなど小さいことでもやっていって政治に関わりたい。」との内容があり、政治の働きを学ぶことで政治に関心をもつことができたと考えられる。このことから、本実践における取組は、主

資料-25

D 小学校における社会科学習チェックシートにおける多面的、総合的に考える力に関わる質問項目の分析結果



権者教育充実のための指導法の工夫を図ることにもつながったのではないかと考える。

小学校高学年の実践授業後の協議会においては、新学習指導要領にて、小学校社会科学習は内容の入れ替えが行われ、これまでの歴史單元から政治単元の順で学ぶ流れが変わることを踏まえ、今後どのように持続可能な社会づくりの視点から学習指導を行うことが望ましいのかが重要になってくるだろうとの意見も出た。

③ 中学校における授業

実践5 E 中学校第2学年

単元：「世界と比べた日本の地域的特色」

中山氏は、ESD地理教材の單元開発における学習方法の基本的な要点として「参加型学習の尊重」及び「未来社会の予測までを含める構成主義的アプローチ」の2点を挙げている。このことから、E 中学校での実践においてもこの2点に注目し、持続可能な社会づくりの視点として、【有限性】を重視した教材開発を行った（資料-26）。

今回、実践した単元は、地理的分野の中でも持続可能な社会づくりの要素が多く含まれ、教科書に「持続可能な社会」という言葉も出てくる。そこで、世界の資源・エネルギー、日本の資源・エネルギーと電力及び、日本の資源・エネルギーの地域的特色について学習した後、私たちの生活に欠かせない電力は今後どうあるべきかを考えさせ、学習問題をつくり追究活動を行う単元を設定した。

非常勤研修員は、生徒に既習内容と実際社会とのつながりを実感させ、多様な視点から追究活動をさせるために、日本の資源・エネルギー問題に関する資料等（資料-27）を用意し、ICTを活用して提示した。学習した内容を基に未来社会の予測を考えさせるため、主なエネルギー資源

の可採年数の資料を提示し、これを基に「これから先の将来、このエネルギー資源がなくなってしまうらどうなるのだろうか」と生徒の思考を揺さぶり、学習問題づくりにつなげていった。

そして、「10年後の日本の発電構成で、最も多いのはどの発電になるだろう」と学習問題を設定した。追究の視点として、さまざまな発電方法の中から、「火力・水力・原子力・再生可能エネルギー」の四つを選択し、追究の視点として設定した。

本実践においては、知識構成型ジグソー法を用いた参加型学習を行った。班員の一人一人が自分の担当する発電方法について、非常勤研修員が用意した資料や生徒が必要に応じて自ら調べてきた内容を基に自分が追究する発電方法のメリット、デメリットについてまとめさせた。

今回、生徒が調べたことをまとめる際に用いたツールは、PMIシートである(資料-28)。このPMIシートには、自分が調べた発電方法についてのプラス面:Plus(メリット)、マイナス面:Minus(デメリット)そして、気になること:Interesting(疑問点を含む)を記述することができるように工夫されていた。

PMIシートを用いて、四つの発電方法についてこれまで学習したことを基に全体で振り返った後の生徒の学習問題に対する予想を分析すると37人中22人の生徒が最も多い発電方法として「再生可能エネルギー」と記述していた。

しかし、知識構成型ジグソー法という学習形態を設定し、追究の視点に沿ってエキスパートグループで交流した後の生徒の記述を分析すると、37人中15人の生徒が、最初に記述していた発電方法の内容が変わっていることが分かった。

そして、生徒はホームグループに戻り、エキスパートグループで調べた内容について交流した後、学習問題の答えについてグループで話し合った。

ホームグループでの交流活動において、生徒はPMIシートを活用し、自分がエキスパートグループでまとめた内容を相手に分かりやすく伝えることができていた。ホームグループでの交流活動後、各ホームグループが考えた10年後のエネルギーのベストミックスについてのクロストーク(全体交流)を行った(資料-29)。

クロストーク後、非常勤研修員は各ホームグループの考えを黒板に張り出した。これにより生徒は自分の考えを見直し、相互補完をスムーズに行うことができ、学習の振り返りを記述することができていた(資料-30, 31)。

本実践では、電力会社の方をGTとして招き、ホームグループでの交流活動及び実際に生徒たちが考えた10年後のエネルギーミックスについてクロストークを行っている様子を参観してもらった。そして授業の最後に、生徒たちの考えた10年後のエネルギーミックスの内容について

資料-26 E 中学校における単元の整理表

実施学年		第2学年										
単元		日本の様々な地域										
持続可能な社会づくりの視点				持続可能な社会づくりの視点に立った学習指導で重視する資質・能力								
I	II	III	IV	V	VI	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
【多様】	【相互】	【有限】	【公平】	【連携】	【責任】	【批判】	【未来】	【多面】	【伝達】	【協力】	【関連】	【参加】
○	○	◎			○			○	○	○		

資料-27 非常勤研修員が用意した資料の一部



資料-28 本実践において使用したツール

PMIシート			
それぞれの発電について、資料を見ながら分析してみよう!			
	良い点(Plus)	悪い点(Minus)	気になる点や疑問点(Interesting)
火力発電			
原子力発電			
水力発電			
再生可能エネルギー			

次回、私は() 発電)のエキスパートになります!

資料-29

クロストークの様子



資料-30

自分の考えをまとめる姿



資料-31 各ホームグループが考えたベストミックス



持続可能な社会づくりの視点から評価してもらった。そして、日本のエネルギー資源について、現在どのようなことが行われているのか、あるいは今後行われる予定の取組について知ることができる場を設定した。これにより、生徒は限りある資源をより身近なものとしてとらえることができ、今後どのような行動をとることが望ましいのかについて考えることができた。

その結果、単元後の生徒の記述には、【有限性】に関わる内容が増えた。さらに、生徒の学習後の感想には「それぞれの発電のメリット・デメリットを知ることができたので、それぞれの発電のイメージが大きく変わりました。持続可能な社会のために、発電について知ることがとても大切なことだと思います」との記述もあった。このことから、様々な発電方法について学習したことで、多様なエネルギーが移動・消費されたり循環したりしていることに気づき【相互性】や【多様性】に関する内容についても触れて記述することができ、本単元を通して自分たちの日常生活を振り持続可能な社会づくりの見方・考え方が身についたと考えられる。

単元前後の社会科学学習チェックシートの分析結果を見ると、「批判的に考える力」に関わる質問項目の肯定的回答率が57%から83%へ大幅に伸びた。これは、本実践において教材分析表を活用し教材分析・教材開発・授業づくりを行い、知識構成型ジグソー法を用いた交流活動が有効であったからと考える。

7 教材分析表を活用した授業実践における教員の変容

本研究において、授業改善の過程における一連の取組を振り返る為に、非常勤研修員を対象にしたチェックシートを作成し、授業後に実施した（p.23・24巻末資料-③参考）。

その結果、実践前と比べると学習活動に関する教員自身の取組について、すべての質問項目（資料-32）において全員が肯定的な回答をしていた。これは（p.7資料-1）で示した持続可能な社会づくりの視点の学習指導においてめざす「学習方法」について、本研究を通して実践することができたからであると考えられる。

また、教材開発・授業づくりに関する質問項目からは、児童生徒の発達段階、学級の実態などに応じた取組を行うことができたことが分かった（資料-33）。その一方で、自作教材づくりに取り組むためには、十分な時間の確保がまだ必要である課題も見えてきた。

今回の実践を通して自分自身の成果として感じたことを書いてもらったところ、（資料-34）のような記述があり、持続可能な社会づくりを意識した本研究を通して、教員自身が学習指導に対する自信をさらに深めることができたとの変容も見られた。

資料-32 学習活動に関する質問項目

番号	質問項目	肯定的回答の割合
1	児童生徒が、学習問題(課題)を把握し、追及するような問題解決型の学習	100%
2	図やグラフ等資料を読み取る学習	100%
3	話し合い活動(ペア学習やグループ活動など)	100%
4	調べ学習(図書室やインターネットなどの活用も含む)	75%
5	調べたことをレポートや新聞にまとめる学習	75%
6	自分の意見を発表する場を設けた学習	100%

本研究において、教材分析表を活用し、持続可能な社会づくりの視点から教材分析を行い、教材開発・授業づくりを行った一連の流れを振り返ってもらったところ、今後も教材分析表を有効的に活用していきたいとの意見もあった。

資料-33 教材開発・授業づくりに関する質問項目

番号	質問項目	肯定的回答の割合
7	学習のねらいに応じてワークシート等の教材や教員を準備している。	100%
8	自作教材づくりに積極的に取り組んでいる。	50%
9	児童生徒の経験を踏まえた教材づくりをしている。	75%
10	児童生徒に興味・関心をさせる教材を選択・開発している。	75%
11	発展的な内容や補充的な内容の教材を準備している。	75%

8 研究の成果

(1) 「教材分析表」の有効性について

非常勤研修員による今回の実践において、教材分析表を活用した授業づくりについて振り返ってもらったところ、（p.19資料-35）のような記述があった。このことから、本研究において教材を見直す際の手だてとして教材分析表の活用が有効であったと言える。

また、実践後の振り返りにおいて今後の教材分析表の活用法として、実践を重ねていくことで持続可能な社会づくりの視点の具体例の内容をさらに増やし、非常勤研修員自らこの教材分析表の内容を見直し、付加修正して活用したいとの意見もあった。

資料-34 実践後の非常勤研修員の記述から

資料集め、取材の仕方が分かりました。郷土史や古い新聞のネタ等、あらゆる資料を読みました。おかげで、福岡の歴史が分かってきたので、今回の大濠公園のことだけでなく、当時の様子も分かってきたように思います。自分自身が事実として知っていることができたので、これからは以前より自信を持って授業が下ろすつもりです。

して、どうとらえているのかを教員がしっかりと考え（予測し）、話し合いの目的を明確に持たせた上で設定をする必要がある。

(3) 社会科学習と他教科等との関連における課題

- 教員自身が社会（世の中）の動きに対して、「持続可能な社会とは何か」について考えることが大切である。教員が持続可能な社会についての視点をもって社会（世の中）の動きを見ることで、授業づくりにそれを最大限に生かすことができる。
- 本研究においては、小・中学校教員が協同して授業実践を行った。これにより、小学校と中学校との違いや共通点について意見交換をすることができた。今後は、新学習指導要領の実施を踏まえ校種や学年、教科の垣根を越えて学習指導について語らう時間の確保が必要になってくると感じる。
- 年間指導計画やこれまでに作成した学習指導案を基に教材分析表を活用し、持続可能な社会づくりの視点から見直す過程において、他教科等との関連についても整理していくことができる。
- 新学習指導要領にも示されているように、これからの学校教育において環境教育のみならず、防災教育など多くのカリキュラムの中に、「持続可能な社会づくりの視点」が入っていること踏まえ、私たち教員が、「持続可能とは何か」ということを考え、その価値観を児童生徒に養っていくことが必要だと考える。

資料

巻末資料① ESD推進に関わるこれまでの動き（長期研修員作成）

1987年(昭和62年)	国連に設置された「環境と開発に関する世界委員会」が公表した報告書において、「持続可能な開発」についての定義が取り上げられた。
1992年(平成4年)	国連環境開発会議(地球サミット)にて、持続可能な開発についての行動計画「アジェンダ21」に教育の重要性が盛り込まれた
2002年(平成14年)	<p>持続可能な開発に関する世界首脳会議(ヨハネスブルグ・サミット)において、日本が「国連持続可能な開発のための教育の10年」を提唱。</p> <p>第57回国連総会にて、2005～2014年までを「国連ESDの10年」とする旨の決議案を提出。→満場一致採択</p> <p>持続可能な開発のための教育(ESD)に関するユネスコ世界会議が開催 →「あいち・なごや宣言」の採択。「ESDに関するグローバル・アクション・プログラム(GAP)」の開始</p>
2005年(平成17年)	<p>ユネスコが、国連ESDの10年実施計画案を策定。</p> <p>12月には、国内で、関係省庁連絡会議を内閣に設置</p>
2006年(平成18年)	「我が国における『国連持続可能な開発のための教育の10年』実施計画」を策定
2008年(平成20年)	ESD国連フォーラム2008を国連大学にて開催
2009年(平成21年)	国連ESDの10年の中間年に、ドイツ・ボンにてESD世界会議を開催
2014年(平成26年)	持続可能な開発のための教育(ESD)の推進について通知
2015年(平成27年)	国連サミットにて「持続可能な開発のための2030年アジェンダ」が採択され、「持続可能な開発目標(SDGs)」が策定
2016年(平成28年)	ESD推進の手引きの送付について通知
2016年(平成28年)	<p>我が国における『持続可能な開発のための教育(ESD)に関するグローバル・アクション・プログラム』実施計画の策定</p> <p>→ESDに取り組む様々な主体が参画・連携し、地域活動拠点の形成とともに、地域が必要とする取り組み支援や情報・経験を共有できる『ESD活動支援センター』を整備し、地域の実態を踏まえた効果的な運用を図るとされている</p>
2016年(平成28年)	<p>文部科学省国際統括官付 日本ユネスコ国内委員会がESD(持続可能な開発のための教育)推進の手引き(初版)を作成</p> <p>ESD活動支援センター 開設</p>
2017年(平成29年)	<p>地方ESD活動支援センター 開設</p> <p>第9回ユネスコスクール全国大会/ESD研究大会が福岡県(大牟田市)にて開催</p>

巻末資料－② OECDのキー・コンピテンシーと持続可能な社会づくりの視点に立った学習指導で重視する能力・態度の関連表（先行研究等を参考に長期研修員作成）

	カテゴリー	必要な理由	コンピテンシーの内容 (OECD, 2005年)	ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度との関連
A	相互作用的に道具を用いる (道具を相互作用的に用いること)	○技術を最新のものにし続ける	言語, シンボル, テキストを相互作用的に活用する力	①批判的に考える力 ②未来像を予測して計画を立てる力 ③多面的、総合的に考える力
		○自分の目的に道具を合わせる	知識や情報を相互作用的に活用する力	
		○世界と活発な対話をする	技術を相互作用的に活用する力	
B	異質な集団で交流する (社会的に異質な集団での交流)	○多元的社会的多様性に対応する	他者とうまくかかわる力	④コミュニケーションを行う力 ⑤他者と協力する態度
		○思いやりの重要性	協力する力	
		○社会的資本の重要性	紛争を処理し, 解決する力	
C	自律的に活動する (自律的に活動すること)	○複雑な社会で自分のアイデンティティを実現し目標を設定する	「大きな展望」の中で活動する力	⑥つながりを尊重する態度 ⑦進んで参加する態度
		○権利を行使して責任を取る	人生計画と個人的なプロジェクトを設計し, 実行する力	
		○自分の環境を理解してその働きを知る	自らの権利, 利益, 限界, ニーズを真餅, 主張する力	

巻末資料－③ 非常勤研修員対象の検証授業後のチェックシート（長期研修員作成）

検証授業後のチェックシート＜非常勤研修員対象＞		記入者			
番号	質問項目	よく行っている	行っている	あまり行っていない	行っていない
1	児童生徒が、学習問題（課題）を把握し、追及するような問題解決型の学習	4	3	2	1
2	図やグラフ等資料を読み取る学習	4	3	2	1
3	話し合い活動（ペア学習やグループ活動など）	4	3	2	1
4	調べ学習（図書室やインターネットなどの活用も含む）	4	3	2	1
5	調べたことをレポートや新聞にまとめる学習	4	3	2	1
6	自分の意見を発表する場を設けた学習	4	3	2	1
今回の授業実践を通して、自分の学習指導において、最も工夫改善できたと感じることは何ですか？					
番号	質問項目	とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
7	学習のねらいに応じてワークシート等の教材や教具を準備している。	4	3	2	1
8	自作教材づくりに積極的に取り組んでいる。	4	3	2	1
9	児童生徒の経験を踏まえた教材づくりをしている。	4	3	2	1
10	児童生徒に興味・関心をもたせる教材を選択・開発している。	4	3	2	1
11	発展的な内容や補充的な内容の教材を準備している。	4	3	2	1
12	学校の特色ある教育活動に結びつく教材を開発している。（開かれた学校づくり）	4	3	2	1
13	地域の人材や専門家（企業など）を活用した授業づくりをしている。	4	3	2	1
14	地域の自然環境や社会環境などを生かした教材づくりをしている。	4	3	2	1
15	社会の出来事を生かして教材開発に取り入れるなどの工夫をしている。	4	3	2	1
16	児童生徒が自分の生活との関連に気付くことができる教材の開発をしている。	4	3	2	1
今回の教材開発・授業づくりにおいて、自分にとっての成果は何ですか？					
今回の教材開発・授業づくりを通して、自分自身で感じた課題は何ですか？					

参考文献・参考資料

- | | | | | |
|----|-----------------------------|--|-------------------|---------|
| 1 | 文部科学省 | 小学校学習指導要領 | 東京書籍 | (平成20年) |
| 2 | 文部科学省 | 中学校学習指導要領 | 東山書房 | (平成20年) |
| 3 | 文部科学省 | 小学校学習指導要領解説 社会編 | 東洋館出版社 | (平成20年) |
| 4 | 文部科学省 | 中学校学習指導要領解説 社会編 | 東洋館出版社 | (平成20年) |
| 5 | 文部科学省 | 小学校学習指導要領 | | (平成29年) |
| 6 | 文部科学省 | 中学校学習指導要領 | | (平成29年) |
| 7 | 文部科学省 | 小学校学習指導要領解説 社会編 | | (平成29年) |
| 8 | 文部科学省 | 中学校学習指導要領解説 社会編 | | (平成29年) |
| 9 | 井田 仁康 | 小学社会 3・4年上・下 | 日本文教出版社 | (平成26年) |
| 10 | 井田 仁康 | 小学社会 6年上・下 | 日本文教出版社 | (平成26年) |
| 11 | 次山 信男 | 楽しく学ぶ 小学生の地図帳 4・5・6年 | 帝国書院 | (平成26年) |
| 12 | 原 茂夫 | よいこの社会科 | 光文館 | (平成29年) |
| 13 | 谷内 達 | 社会科 中学生の地理 世界の姿と日本の国土 | 帝国書院 | (平成27年) |
| 14 | 金坂 清則 | 中学校社会科地図 | 帝国書院 | (平成27年) |
| 15 | 中山 修一・和田文雄・湯浅 清治編 | 持続可能な社会と地理教育実践 | 古今書院 | (平成23年) |
| 16 | 中妻 雅彦 | 「考える」社会科の授業 | 同時代社 | (平成28年) |
| 17 | 澤井 陽介・加藤 寿朗 | 『見方・考え方』（社会科編） | 東洋館出版社 | (平成29年) |
| 18 | 鈴木 敏正 | 持続可能な発展の教育学～ともに世界をつくる学び～ | 東洋館出版社 | (平成25年) |
| 19 | トランスファー21 | ESDコンピテンシー
～学校の質的向上と形成能力の育成のための指導指針～ | 明石書店 | (平成24年) |
| 20 | 五島敦子・関口知子 | 未来をつくる教育ESD～持続可能な多文化社会をめざして～ | 明石書店 | (平成24年) |
| 21 | 澤井 陽介 | 平成29年度版 学習指導要領改訂のポイント 小学校・中学校 社会 | 明治図書 | (平成29年) |
| 22 | 教育科学 | 社会科教育 No.698～703 | 明治図書 | (平成29年) |
| 23 | 東洋館出版社編集部 | 平成29年度版 小学校 新学習指導要領ポイント総整理 | 東洋館出版社 | (平成29年) |
| 24 | 文部科学省国際統括官付 日本ユネスコ国内委員会 | 「ESD（持続可能な開発のための教育）推進の手引き（初版）」 | | (平成28年) |
| 25 | 中教審教育課程部会 | 「社会・地理歴史・公民ワーキンググループにおける審議の取りまとめについて（報告）」 | | (平成28年) |
| 26 | 国立教育政策研究所教育課程センター | 評価基準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校 社会】【中学校 社会】 | 教育出版 | (平成23年) |
| 27 | 国立教育政策研究所教育課程センター | 『学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究最終報告書』 | 国立教育政策研究所教育課程センター | (平成24年) |
| 28 | 「国連持続可能な開発のための教育10年関係省庁連絡会議 | 「我が国における『国連持続可能な開発のための教育10年』実施計画」 | | (平成23年) |
| 29 | 日本ユネスコ国内委員 | 持続可能な開発のための教育（ESD）に関するグローバル・アクション・プログラム | | (平成26年) |
| 30 | 日本ユネスコ国内委員 | 持続可能な開発のための教育（ESD）の更なる推進に向けて | | (平成27年) |

- 31 環境省 「ESD環境教育プログラム実証等事業」全国事務局
「ESD環境教育プログラムガイドブック③」 (平成27年)
- 32 ESD-J ホームページ <http://www.ESD-j.org/j/ESD/>
- 33 ACCU ホームページ [http:// www.accu.or.jp/jp/theme/ESD.html](http://www.accu.or.jp/jp/theme/ESD.html)
-

研究指導員

小田 泰司 (福岡教育大学 教授)

長期研修員

積山 美紀子 (百道中学校 教諭)

非常勤研修員

久保 裕也 (板付北小学校 教諭)

永迫 絵美 (鳥飼小学校 教諭)

原田 まみ子 (壱岐小学校 教諭)

奥本 裕樹 (弥生小学校 教諭)

藤田 政士 (玄洋中学校 教諭)

担当主事

久保田 篤 (研修・研究課 主任指導主事)